

「読み」のレベル設定に関する一考察

——八木重吉「母をおもう」を具体例として——

望 月 善 次
(岩手大学教育学部)

一 緒 言

(i) テーマ設定の契機

国語教室の抱えている問題の一つに「読み」の曖昧性の問題がある。「読み」によって喚起されるものが、数式の解答のごとく、はっきりとした形(例えば、一つの解答という風に)に収斂し難いというような問題が、その具体例であるし、更に極端な場合としては、はっきり収斂し難いものにも拘らず、一定の解答を教授主体から押しつけられてしまう学習主体の不満という例をもあげうるであろう。

もっとも、こうした曖昧性論議には、ともすれば、数式(数体系)と国語教室の「読み」の対象の中心である言語(言語体系)との差違を無視して、両者を同一レベルに置き、しかもそれを二者択一的に論じ易い傾向も見うけられるので、その点については留意せねばならぬであろう。本論は、言うまでもなく、言語と数との本質的差違をなくそうとするものではない。言語と数との性質の差違を踏まえた上で、言語行為の一つたる「読み」に伴う混乱を、より少くしようとするものである。そして、そのことは、国語教室の課題の一つに应えることにもなると考えるのである。

本論では、そのことの具体的作業の一つに「読み」におけるレベ

ル設定の作業が存在すると考え、それに関する一仮説を提出し、その妥当性を、更に、具体的な一作品(八木重吉「母をおもう」)を通して検証せんとするものである。

(ii) 「読み」のレベル設定に関する本稿の観点

ところで、一口に「読み」のレベルと言っても、それをどういう観点から、とらえて行くかについては様々な立場が可能であろう。従って、次にこのことについての、若干のコメントをつけ加えたいと思う。

第一は、「読み」を「何を読むか」というところからとらえていくかについてのコメントである。倉沢栄吉氏は、その具体的あり方として、文字・各種の表示・資料・映像・心をあげているのであるが、本稿では考察対象をこのうちの文字に限定し、しかもそれを、国語教室において曖昧性のもっとも起こりやすいものだと考えられている文学作品を主たる対象として考察を進めんとするものである。

第二は、「読み」の問題を考える際に援用するフレームに関連する。本稿では、その際、情報理論的フレームを援用する。すなわち、△発信者——信号——受信者√というフレームである。文学作品等の言語作品においては、それは△作者——作品——読者√とい

うフレームに読みかえうるであらう。⁽³⁾

第三は、第二であげたもののうち、どこに重点をおいて「読み」を考察していくかの問題である。⁽⁴⁾ 本論の立脚点は、前述した八作者——作品——読者√というフレームのうち、「読み」は、まず何よりも、根本的には、読者のものとして存在するという考えにある。

作者に焦点をあてた「読み」も、作品に焦点をあてた「読み」も所詮は、読者にとつての「読み」として存在するというのが、本論の基本的立場である。本論において、一見、「作者的読み」や「作品的読み」が行れる場合においても、その意識は、常に「読者としての読み」という一点から照射されているのだということを、つけ加えておきたいと思う。

Ⅱ 仮説提出

本論の「読み」に対する観点は、文学的作品をその主たる対象とし、八作者——作品——読者√というフレームに抛り、しかもその重心が読者の立場にあることは、既に述べた。かかる前提に立ちながら「読み」のレベル設定の為に提出せんとする仮説は以下の如きものである。⁽⁵⁾

- a、社会言語的読み（話者）
 - b、（同一作者の）他作品読み
 - c、伝記的読み
 - d、読者の読み
- 以下各項につき、やや敷衍したい。

(i) a、社会言語的読み

ソシュール (Ferdinand de Saussure) のラング (langue) という概念をもち出すまでもなく、⁽⁶⁾ 言語はまず社会的契約として存在する。従って、例えば、日本語という様な個別言語を用いて記されて

いる具体的な（文学）作品においても、第一義的には、言語の社会契約のレベルにおいて、どううけとられるのかという問題が、存在するはずである。例えば、「美しい方ね。」という言葉の具体的作品における受け取られ方も、日本語という言語社会の範囲では、「美しい」という語が「美」の意味を有するのだというところから出発せねば、（言われている人物が実際に美しいのか否か、その前後にどういう文が置かれているか等によって変動する広義の文脈的読みや、それが言われた本人にどういう行動を喚起するか等の）その後の「読み」は不可能なるであらう。我々は、好むと好まざるとに拘らず、この社会言語的レベルから「読み」を始めねばならぬのである。尚、このレベルに属するものとして、ニュークリティシズム (New Criticism) によって創始され、我國の国語教育においては、小西甚一氏⁽⁷⁾などを経て、西郷竹彦氏によって独特な発展を遂げている「話者 (speaker)」の問題を取り上げることができると思われる。

(ii) b、（同一作者の）他作品読み

第一の社会言語的レベルで、意味を確定できぬ時（若しくは、その意味を拡大したり、深化させようとする際）の、確定の仕方の一つに、同一作者の作品の他部分との照合とを勘案して、それを確定せんとするものがある。一つの作品を一つの単位とみなした場合に、同一作者の、他作品との関連が、これに該当するであらう。このような作業を通して、第一の社会言語的レベルの「読み」に、一つのヒントを与えんとすることは、それが、第一のレベルにおいてなされているのではないという認識が明確である限りにおいて、それなりの有効性を有するであらう。

(iii) c、伝記的読み

第一の社会言語的読みのレベルで、意味を確定できぬ際のもう一つの「読み」のあり方として、作者の伝記的事実によって、これを

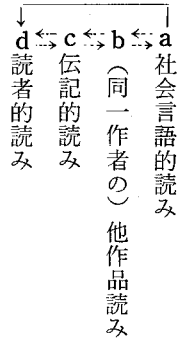
確定せんとする方法がある。「あらゆる偉大な詩(作品)の中には詩人(作者)についての知識が、どんなに完全になっても説明しえない何かがあるのであり、それこそが、もっとも重要なものだ。」とする、T・S・エリオット(Thomas Stearns Eliot)の言を引くまでもなく、一九二〇年代以降の世界の批評史の流れは、上述の「伝記的読み」の有効性を相対化し、その限界を明示せんとする方向にあったと言えるであろう。しかし、日本における、国文学研究の伝統もあり、この方法が、厚い伝統的遺産を有して居り無視し得ぬ蓄積を蔵しているのもまた事実である。それであるだけに、この伝記的方法による読みの具体的作品への適用については、一層慎重でなければならぬであろう。

(例) d、読者の読み

a(場合によっては、b、cを含む)のレベルを踏まえた上で、読者が、自分自身にひきつけた読みをするのが、このレベルの読みである。「五十人の異なった読者は、一つの共通な叙述(picture)を経験するのではなく、五十の異なった叙述を経験するのである。」というI・A・リチャーズ(Ivor Armstrong Richards)の言は、この事情をもっともよく説明しているものである。即ちこのレベルにおいては、読み手の自由なる飛翔こそが重要な課題なのである。このレベルの読みは、一定の読みに収斂して行くものの対極へ拡散して行くところにある特色があるのだと言ってよいであろう。従って、特定の読みへの具体的言及は困難となるわけであるが、本稿では、それを、主として国語教室の読みのうち、a/cレベルに入らぬであろう問題を取り上げる形で行おうと思うのである。

(例) 国語教室における読みの基本

ところで、国語教室においては以上四つの読みは、どう関り合ひべきであろうか、私としては、次の様な構造を考えている。



即ち、多くの国語教室の実際においては、a↓dを基本にしなければならぬというのがこの図における根本的考えである。bやcのレベルの適用については、既に述べてきたごとく、そのレベルにおける有用性と限界とを十分に認識した上でその適用を計らねばならぬであろう。仮にも、aレベルにおいて意味を確定し難い作品について何の断りもなしにb・cを援用して、そこから導き出されるものを唯一の正解として、学習主体に押しつける様なことをしてはならぬであろう。そしてこのことは、教材研究の段階においても、しっかりと認識されねばならぬことであろう。

Ⅲ 仮説適用の具体例

——八木重吉「母をおもう」を例として——

(i) 「母をおもう」をめぐるノート

(1) 「母をおもう」をとりあげる理由
具体例として、八木重吉「母をおもう」を取り上げるについては、その出発点には、当然のこととして、私自身の八木重吉作品への評価が存在する。文学作品として検討に値するものであるか否かという評価があるのである。

「重吉を稀有な宗教詩人」とする田中清光氏や「日本の基督に関する詩は、八木重吉の詩をもって私は最高としたい。」とする草野心平氏の言を私も、肯定的に受けとめているのだというのがそれへの解答である。

こうした評価を前提として、本論で「母をおもう」を取り上げ

る、更に直接的な理由は、この作品が後述の如く、社会言語的レベルにおいて意味を確定し難い箇所をいくつか有していて、読みのレベル設定の上で、有効な一例となりうると思うからである。

(ii) 八木重吉概説

一八九八年（明治三十一年）東京府下境村（現在の東京都町田市）生れ。鎌倉師範を経て東京高師卒。御影師範（兵庫県）東葛飾中（千葉県）にて「英語」教諭。高師卒業時近くからキリスト教と交り、主として内村鑑三の著作によつた熱烈なクリスチャン。二九才にて病没。その作品の殆んどは、『定本 八木重吉詩集』『八木重吉詩稿 花と空と祈り』『八木重吉 未発表遺稿と回想』¹³⁾の三つによつて知ることができる。

研究の現状は、関茂、田中清光、吉野登美子氏による著作をはじめとして、作家論、伝記論的研究について厚い。が、その作品研究自体の問題としては、今後を俟たねばならぬ点も少なくない。

(iii) 「母をおもう」

「母をおもう」は、現行『定本』では、次の様になっている。

母をおもう

けしきが

あかるくなってきた

母をつれて

てくてくあるきたくなった

母はきつと

重吉よ重吉よといくどでもはなしかけるだろう

〔『定本』P・八七〕

ところで、この作品は、現在確認できる範囲では、最初大正十四

年（一九二五）に、重吉自身も、その同人の一人であった『詩之家』（佐藤惣之助主宰）十月号に発表せられている。（同時発表作品、「花がふつてくると思う」「涙」）。その後、重吉が死の直前に編んだ彼の第二詩集『貧しき信徒』（発行は病没翌年の昭和三年。野菊社）の中に冒頭から七番目の詩（全篇一〇三篇）として収載されている。尚『定本』が「現代かなづかい」をとっているため以外の本文の異同はない。¹⁴⁾

この作品が発表時から話題になったものであることは、『詩之家』の次号たる十一月号の合評欄において、いち早く陶山篤太郎氏がとりあげていることから明らかであろう。¹⁵⁾

その後、重吉作品に触れるもので、この作品に言及する者も少なくない思いつくままにあげてみても、神原克重、菊池ゆき、野良瀬正夫、関茂、阪本越郎、西郷竹彦、吉野登美子、郷原宏及び文芸教育研究協議会、光村図書出版株式会社の八氏、二団体を挙げる事ができる。（以上のうちで作品の具体的分析にまで及んでいるものは、阪本、西郷、郷原の三氏及び二つの団体のものに限られている。）

(iv) 仮説適用の実際

「母をおもう」を以下の如く、四分する形で、上述した「読み」のレベル適用の実際を論じてみたいと思う。勿論、こうした逐語主義的な方法は「読み」の問題を極度に単純化しすぎる危険性をもつではあるが、それだけに「読み」のレベル差の認識をなしやすいという長所を有するであろう。

(イ) けしきが／あかるくなってきた

(ロ) 母をつれて

(ハ) てくてくあるきたくなった

(ニ) 母はきつと／重吉よ重吉よといくどでもはなしかけるだろう

(1) けしきが／あかるくなってきた

a 社会言語的読み

ここでまず問題となる点は「けしきが／あかるくなってきた」とは、具体的には、どういうことか、ということであろう。この社会言語的レベルで言えば、「けしきが／あかるくなってきた」からいえることは「暗→明」の変化を示しているということのみであろう。そして、この言表が、次の「母をつれて／てくてくあるきたくなった」を誘発するに至ったと指摘しうるのみであろう。

もっとも、「暗→明」の変化と言っても、そのあり方の可能性としては、次の三つが考えられるであろう。

① 心(内界)が明るく変化したので、外界(自然)それ自身には、目立った変化がなかったにも拘らず、明るくなったと感じた。

② 外界(自然)が変化したので、その変化に触発されて心(内界)も変化した。

③ ①↓②

それは、とも角として、ここで具体的にとりあげうるイメージとしては、季節的变化(春・秋・夏)、時間的变化(朝・夕)気候的变化(雨上り・雲の切れ間)場所的变化(乗物による移動)などが考えうるであろう。しかし、このレベルにおいて、その具体的あり方を例えれば一つに絞るといふ風に決定することはどうしても無理であると思われる。(ちなみに、阪本越郎氏は「秋」を、||「暗→明」のあり方としての③も示唆している||光村版『中等新国語 教師指導書』は「春」を||「秋」も許容している||、『文芸読本 ぶんげい(文芸)指導資料集』は上述の③を示唆しているがその根拠は、いずれの場合においても明示されてはいない。)ここでは、上述したごとく「けしきが／あかるくなってきた」ことが、「暗→明」の変化を意味し、次の「母をつれて／てくてくあるきたくなった」

を導き出すのだということが押さえ得れば、十分であろう。

b (同一作者の) 他作品読み

社会言語的レベルでは、絞ることのできぬ具体的イメージを限定せんとして、重吉の他作品を用いてみようとするのがこのレベルの読みである。

ここでは具体的には重吉作品中の「母をおもう」以外における「明るさ」を示すと思われる語について列挙するという方法をとりたいと思う。

尚、対象作品は『定本』『花』『未発表遺稿』の他田中清光氏の『詩人 八木重吉』に収録されているもの及び森田進氏によって紹介された「おしろい花」一篇である。(次ページ第一表参照)

「明るさ」を示す語の範囲と「あかるくなる」との関連・及び文芸作品を数量化することに伴う問題を蔵するものであるが、それでも、季節的には「秋」、時間的には「夕」に傾斜し、しかもそのほとんどが大正十三年以降に発生しているという(この年代の問題については次の「伝記的読み」のレベルとも交差する問題でもあろう)が、重吉作品の傾向は、はっきりとみてとれるであろう。

c 伝記的読み

重吉が、この作品をどの様な生活状況の中で創作したかを手がかりとして、意味限定を行わんとするのが、このレベルの読みである。

重吉の「母をおもう」の発表は、前述のごとく『詩之家』の大正十四年十月号において行われた。従って、ここから「けしきが／あかるくなってきた」を「秋」のことだとする一つの根拠が発生するのであろう。ところが、同じ伝記的なものの基礎資料の一つである吉野登美子氏の『琴はしずかに 八木重吉の妻として』は、この詩を「朝」と思われるところに置いているから、その辺りの事情は、やや複雑化するのであろう。ここでは、以上二つの考えを一つにする決め手はないと言っておいて、さしつかえないと思われる。

第一表 重吉作品の「明るさ」

項 目	作 品 (所収・創作年代)
秋	木 (P. 109・『貧』) 障子 (P. 109・『貧』) 素朴な琴 (P. 111・『貧』) 響 (P. 111・『貧』) 大正15) 秋のころ (P. 293・大正14―5) 悔 (P. 317・大正14秋) 茅 (P. 317・大正14秋)
夕	日が沈む (P. 92・『貧』) 夕焼 (P. 106・『貧』) △ゆうやみの▽ (P. 209・大正13―12) △やわらかく▽ (P. 216・大正13―12) △ゆうぐれの松林 (P. 291・大正14―9)
冬	冬日 (P. 106・『貧』) 日をゆびさしたい (P. 107・『貧』) 冬 (P. 349・昭和元―2) 冬 (『詩人』P. 357・大正15―3)
夏 (の街)	△なつのまちを▽ (『花』P. 151・大正13) 植木屋 (P. 27・『秋』) 西瓜を食おう (P. 100・『貧』) △たいへん▽ (『花』P. 131・大正13)
陽	△この芝生まで▽ (『花』P. 146・大正13) 涙 (P. 86・『貧』)
春	鶯 (P. 375・昭和元―3)
心	不思議 (P. 95・『貧』) 大正15―1)
森	△あれは夢だったか▽ (P. 395・昭和元―5)
故郷	故郷 (P. 112・『貧』) 大正15―1) △妻よ▽ (『花』P. 157・大正13)
家	洗礼 (P. 348・昭和元―2)
イエス	1、所収ページのみが記してあるものは全て『定本』。『詩人』 は、田中清光詩人、八木重吉 2、年代：『定本』『花』に明記のないものについては、1の 田中氏のものよっている。『貧』『秋』は、それぞれ『貧 しき信徒』『秋の瞳』を示す。
備考	

くり返す様ではあるが、伝記的読みを支える読み方は、その創作した作者の生活状況が作品世界に反映されているという前提を認めるところから出発する。このレベルの読みにおいては、その前提の吟味が常になされねばならぬというところにこそ、留意点があるとすべきであろう。

d 読者の読み

社会言語的レベルであげた様に「けしきが／あかるくなってきた」が「暗→明」の変化を意味し、それが「母をつれて／てくてくあるきたくなった」を誘発するという、より以上のことが決定できぬのであれば、「けしきが／あかるくなってきた」に関する読者の読みには、読者の読みは多様であるという原則以上の自由な解釈が保証されねばならないであろう。他作品読みや、伝記的読みのレベルで、ある方向が出たからと言って（況して、ここでは、他作品読みや、伝記的読みにおいても、具体的イメージを一つに絞ることの無理が証明されている。）それに従って、そのレベルから抽出されるものを、唯一の解答として、他者（学習主体）に押しつける様なことをすれば、縮言で述べた如き、「解答押しつけられ主義」を招くこととなる。

(d) 母をつれて

a 社会言語的読み

「母をつれて」の「つれて」から判明することは、重吉なる話者 (Speaker) が、相当の年令に達しているということである。人間は、「母」に関して常に二つの側面を背負って生存する。つまり、母は何才になっても母であり、その懐ろに入って甘えるべき存在であるという面と、一個の人間として独立して行くためにまず乗りこえて行くべき存在としてである。²³⁾

この作品からうかがえる重吉は、先にもあげたごとく、少くとも社会的には独立期に達している年令だと考えうる。しかしこの作品の母のあらわれ方は、それに対抗し、そこから独立を果して行くべ

き抵抗体としてではなく、あくまでも、甘えるべき存在としてとらえられているのである。²⁶⁾

b (同一作者の) 他作品読み

重吉の他作品における母はどんな母であろうか。具体的にいくつかの作品を列挙してみたい。

母の瞳

ゆうぐれ
瞳をひらけば

ふるさとの母うえもまた

とおくみひとみをひらきたまいて
かわゆきものよとしいたもうこちするなり

〔『定本』P、八五〕

ふるさとの川

ふるさとの川よ

ふるさとの川よ

よい音をたてながれているだろう

(母上のしろい足をひたすこともあるだろう)

〔『定本』P、一〇七〕

母

お母さま

わたしは 時とすると

お母さまがたいへん小さいひとのようにおもえてきて

このてのひらのうえへいただいて

あなたを拜んでいるようなきがしてくるがあります

こんなあかるい日なぞ

わたしの心は美しくなってしまう

お母さんをこの胸へかざり
いばってやりたいようなきがします

〔『定本』pp.三〇一〜三〇二〕

母の顔

お母さんの顔をみたくなった

お母さんの顔をとおりにぬけると

本当のことがわかるように思えてならない

〔『定本』P、三二五〕

以上のごとき重吉作品における母は「母をおもう」の母と同一性を有する「甘えるべき存在としての母」であることが判明する。

c 伝記的読み²⁷⁾

「母をおもう」創作時の重吉とその母との実生活的状況を解明し、それを作品の母と重吉とに重ねようというのが、このレベルでの典型的読み方のあり方であろう。「母をおもう」が発表された大正十四年に重吉は二七才である。彼は母ツタの二二才の子供であるというから、ツタは当時、おおよそ五十才であったということが出来る。当時重吉は、千葉県東葛飾郡千代田村柏に住んでいたというし、母は、重吉の生地、東京府下南多摩郡境村に住んでいたというのである。重吉は、病氣などをすると、無理矢理に枕元へよんで坐らせておくことがあったという。²⁸⁾妻とみとの熱烈な恋愛、結婚を経て、母性脱出をなしたはずの重吉の中に尚、母の問題は、大きく深い意味をなしているのである。²⁹⁾

d 読者の読み

|| 省略 ||

(f) てくてくあるきたくなった

a 社会言語的読み

以下「てくてく」を主たる対象として論じて行く。ところでこの

擬態語を、社会言語的読みの典型的な方法の一つである辞書による確認を通して作業を進めることとする。

手許にある辞書のいくつかで確認し得たところを整理すると、次の如く三つの層に分類することが可能であると思われる。³⁰⁾

①単に「歩くさま」としているもの

〔『言林』(小学館)』『新国語中辞典』(三省堂)〕

②自動車等の乗物ではなく「徒歩」に強調のあるもの。〔『言泉』(大倉書店)〕

③歩く具体的な状態に及んでいるもの。

(a)同じ調子でひたすら歩くさま〔『日本国語大辞典』(小学館)〕

(い)ふつうの足なみで歩いて行くようす。

〔『学研国語大辞典』(学習研究社)〕

(う)まめに歩くさま〔『広辞苑』(岩波書店)〕

(え)足にまかせて歩くさま〔『新言海』(日本書院)〕

(お)つとめて歩くさま〔『広辞林』(三省堂)〕

(め)徒歩を速かにする状を言う〔『大言海』(富山房)〕

ここでは③のレベルが問題となるであろうが、この作品に即して言えば、(a)(い)辺りが妥当な様に思われる。そして「母をつれて・てくてくあるく」という想像が、重吉の心に或る充足を与えているのだということが重要な点であろう。

b (同一作者の) 他作品読み

重吉の他作品の中で、「てくてく」は(「てくてくと」という形ではあるけれども)只一例のみある。

てくてくと

こどものほうへもどってゆこう

〔『定本』p. 一六六〕

ここには「重吉の認知の一種肉體性ともよぶべきもの」³¹⁾が示されていて、それは「母をおもう」を読んで行く上にも、相通ずるものを有していると思う。

ついでながら「歩るきたくなる」という重吉の作品をあげておこう。

歩るきたくなる

むやみと

歩るきたくなる

あるくことが

いちばんすぐれたことのようにおもえてくる

〔『定本』pp. 二七七～二七八〕

c 伝記的読み

|| 省略 ||

d 読者の読み

学習主体たる生徒や学生達に「てくてく」とは、どういう歩き方で、それが話者のどういう感情と結びつくのだろうかと考えさせることは案外難しい。「てくてく」という語が、この作品におけるごとく、充足感と結びついて用いられるということが、日常言語使用の中には必ずしも多くないというところに、その一つの原因があるであろう。その解決の手段として「てくてく」と並ぶべき擬態語(「すたすた」「さっさっ」「すたこら」等)をあげることやその動作化等が考えられるであろう。

(二)母はきつと／重吉よ重吉よといくどでもはなしかけるだろう

a 社会言語的レベル

ここに関しては、話者(speaker)の問題に限定して述べてみたい。ところで、具体的な論述に入る前に二つのコメントをつけ加えたいと思う。

一つは、話者 (speaker) の文学研究史における位置についてである。話者 (speaker) のあり方を規定する考え方を視点 (point of view) というがこの視点論は、文学作品を (悪しき意味での) 伝記的研究から切り離し、「詩 (作品) を、詩 (作品) 自身として理解する」(understanding of the poetry as poetry) ことを目指した流れの中から発生しているのだらうということへの注意喚起である。⁽³³⁾

もう一つは、視点論の文学研究構造における位置についてである。西郷竹彦氏によるまでもなく、視点論は「作品の構造や主題・文体などの相関関係をぬきにして個別に扱われて」⁽³⁴⁾はならないのであろう。本論において、これを個別的に取り扱うのは、そうしたことを考慮せぬためではなく、もっぱら、本論のスペースに関わる問題による。

さて以上二つのコメントを前提として、具体的に「母をおもう」における話者 (speaker) の問題を取り扱うこととしよう。

この詩は「重吉」という第一人称話者を通して、語られている点については問題がないであらう。再び、西郷氏の言によれば、重吉が「視点人物」であり、母が「対象人物」となる。

視点人物 (見るがわ) $\left\{ \begin{array}{l} \text{内面 (心)} \\ \text{外面 (姿)} \end{array} \right.$ はよく描れている
はとらえにくい

対象人物 (見られるがわ) $\left\{ \begin{array}{l} \text{内面 (心)} \\ \text{外面 (姿)} \end{array} \right.$ はとらえにくい
はよく描れている

なる公式を、重吉と母との関係にあてはめてみれば⁽³⁵⁾

視点人物 (重吉) $\left\{ \begin{array}{l} \text{内面 (心)} \\ \text{外面 (姿)} \end{array} \right.$

対象人物 (母) $\left\{ \begin{array}{l} \text{内面 (心)} \\ \text{外面 (姿)} \end{array} \right.$

の様な文章構造が成立することになる。この詩において、重吉の内面、母の外面が、どの程度、明瞭に描れているかについては問題もあろうが、重要なのは、この文章構造においては、重吉の外面、母の内面は、直接的には敘述されぬ構造を有している点である。

b (同一作者の) 他作品読み || 省略 ||

c 伝記的読み || 省略 ||

d 読者読み

a で述べたところを前提とするならば、次の様な質問位 (特にそれが唯一の正解を求めてなされたとするならば) 学習主体たる子供達を当惑させるものはない。すなわち、「母はこの時どう思ったか」とか「どう思って話しかけたか」という質問である。勿論、この場合、この文章構造を熟知した上で、敢えて母の気持を問うことを通して、子供達のイメージをふくらまして行こうとする考え方もある。⁽³⁶⁾しかし、その際にも、求めているところは、文章の形では直接には描れていないのだということを、教授主体は明確に自覚しておかねばならぬだろう。

IV 結語

本論において、私はまず国語教室の混乱の一因が、(読み)の曖昧性に起因することを指摘した。そして、これに対する方途の一つとして「読み」のレベルを明確化することが存することに言及し、その一仮説を提出した。それは具体的には

a 社会言語的読み

b (同一作者の) 他作品読み

c 伝記的読み

d 読者の読み

の四つからなるものであった。そして、国語教室での読みは、基本的には、

a 社会言語的読み

b (同一作者の) 他作品読み

c 伝記的読み

d 読者の読み

なる構造を有しているのだとした。すなわち、b、cレベルの読みについては、その適用の際、有効性と限界性について、十分なる注意を払うべきだと考えるのである。

かかる前提に立ち、後半においては、八木重吉の「母をおもう」を具体例として、仮説の妥当性を論じた積りである。

尚「補遺」として、「八木重吉研究文献目録」を掲げている。この点についても御教示を得たい。

- (1) 倉沢栄吉編著『教育学研究全集12情報化社会とよむことと教育』(第一法規、一九七六)。
 (2) 戦後文学教育の概観は左記に詳し。

浜本純逸『戦後文学教育方法論史』(明治図書、一九七八)。

- (3) 拙稿「作者・作品・読者の視点の統合化に関する一考察——T・S・エリオットとI・A・リチャーズとを手がかりとして——」(『人文科教育研究』№V、(「人文科教育研究」編集委員会、一九七八))
 (4) 現在、国語教室における三者の関り合いは、例えば浜本純逸氏によ

って「文学鑑賞論」の名のものに次の様に整理されている。

- ① 作者を読む、つまり作者の意図を読みとることをめあてとする型。
 ② 作品を読む、つまり作品の主題を読みとることをめあてとする型。
 ③ 読者を読む、つまり読者の主体的な意味づけをめあてとする型。

浜本、前掲書、pp. 三三八～三九二。

尚、浜本氏自身も、この整理は「あえて単純化」(傍点本論筆者)したものであるとされている如く、この様な整理に問題がないわけではないが、その点についての具体的言及は、ここでは留保する。

- (5) 仮説設定には、次のものに示唆を得ている。

J.L. Austin, *How to Do Things with Words*. (Oxford, 1962, 1975)

西山佑司「意味することと意図すること」(『理想』№五四六、理想

社) pp. 九三～一〇七)。

- (6) Ferdinand de Saussure, *Cours de Linguistique générale*, 1919 [F. シンニール小林英夫訳。『一般言語学講義』(岩波書店、一九四〇、一九七二改版)。
 『月刊 言語』Vol. 7, №3 (大修書店、一九七八—三)。

- (7) 小西甚一「国文学における研究と批評——方法的反省」(『国文学』第三十二巻、第三号(岩波書店、一九六四—三))。『国文学解釈と鑑賞』第三十巻 第七号(至文堂、一九六五—六) 前掲書、第三十二巻 第六号(一九六七—五)。

井関義久『批評の文法』(大修館書店、一九七二)。

- (8) 『西郷竹彦文芸教育著作集 第十七巻 文芸学講座 (I) 視点・形象・構造』(明治図書、一九七五)。
 『文芸教育』№26 (明治図書一九七九—五)。

- (9) Thomas Stearns Eliot, "The Frontiers of Criticism," 1956 <Thomas Stearns Eliot, *On Poetry and Poets*, (Faber & Faber, 1961) p. 112>

- (10) Ivor Armstrong Richards, *Principles of Literary Criticism*, (Routledge & Kegan Paul, 1924, 1952) p. 122。

尚本論で扱う八木重吉の詩の中にも「あるひとつの詩をよんだというても/百人あれば百様に読むのですから」という叙述がある。『八木重吉詩稿 花と空と祈り』(弥生書房、一九五九、一九七〇改版)※ p. 一九九。以下本稿では原則として『花』と略記する。

※「一九七〇改版」は奥書には、現在のところ明記されていない。一九七〇年十二月の第十三版から現行版使用との弥生書房編集部の方によっている。

- (11) 田中清光『詩人八木重吉』(麥書房、一九六九 一九七九改訂) p. 一七七。

- (12) 草野心平「覚え書」(『八木重吉詩集』(創元社、一九四八))
 [田中清光、吉野とみ子「八木重吉 未発表遺稿と回想」(麥書房、一九七二) p. 二六三] 尚本論では以下原則として『未発表遺稿』と略記する。

- (13) 『定本 八木重吉詩集』(弥生書房、一九五八、一九七〇改版) 一

九七〇年の改版について、奥書明示のないことは『花』の場合に等しい。(注⑩ 参照) 弥生書房編集部によると改版は一九七〇年十一月の第十六版からという。

尚、本論では以後原則として『定本』と略記する。

『花』『未発表遺稿』についてはそれぞれ注⑩注⑫参照。

- (14) 関 茂、『八木重吉―詩と生涯と信仰―』(新教出版社、一九六五) 田中『詩人八木重吉』前掲書。吉野登美子『琴はしずかに 八木重吉の妻として』(弥生書房、一九七六)。

(15) 尚、研究現状の詳細については本稿の補遺として八木重吉研究文献目録を掲げたので、それに拠りたい。

(16) 尚、『定本』の「現代かなづかい」採用については左記参照。

『定本』pp. 四一八～四一九。

(17) 『未発表遺稿』p. 八七による。

(18) 神原克重「『貧しき信徒』を読みつつ」△『野菊』第六巻第六号、

一九二八▽「『未発表遺稿』p. 一〇八」

菊池ゆき「『貧しき信徒』を読む」△『野菊』前掲書▽「『未発表遺稿』p. 一二六」

野良瀬正夫「願望の詩人」△『八木重吉詩集』附録、八木重吉研

究Ⅱ(山雅房、一九四二▽「『未発表遺稿』pp. 二三八～二三九」

関、前掲書、pp. 九〇～九一。

阪本越郎(「鑑賞母をおもう」)△『日本の詩歌23』、中央公論

社、p. 三四三▽尚、阪本氏のもの、論文ではない。「母をおも

う」の本文の下に阪本氏の鑑賞がついているのである。

西郷竹彦『詩の中の母と子と父と』(みずうみ書房、一九七五)pp.

九六～九七。

吉野、前掲書、p. 一〇〇～一〇一。

郷原宏編『八木重吉詩集』(旺文社、一九七八) p. 九三。

文芸教育研究協議会編『文芸読本 ぶんげい(文芸) 指導資料集』

(明治図書、一九七七) p. 五三。

尚、これは、尾久潔氏により次の形に発展せられている。尾久潔

『詩の教材分析と授業の構想』△『文芸教育』No. 29

△『明治図書』一九八〇△pp. 五三～六二。

『中等新国語 教師用指導書 一上』(光村図書出版株式会社、一九七八) pp. 二七～四六。

(19) 具体的なものとしては、下記によっている。

横須賀薫「介入授業『母をおもう』」△岩手県一関市立本寺小学

校、学校公開授業。一九七九・一〇・一三▽『V・T・岩手大学教育

学部附属教育学センター所蔵』

学生レポート△岩手大学教育学部「国語科教材研究」一九七九年度

後期・一九八〇年度前期▽

(20) (注) 18 参照

(21) ここでは「明るく(なる)」「明るむ」「明るい」「明るさ」をその範囲とする。

(22) 田中、前掲書、pp. 三三一～三三三、pp. 三五六～三五八。

森田進「八木重吉と末繁博一―重吉の「おしろい花」をめぐる―」

△『四国学院大学論集』No. 31、一九七四▽

(23) 重吉の秋への傾斜については、つとに指摘されているし、作品の上

にも次の様なものが見える。

…すべての季節は、秋を、つくり出さんための過程^{プロセス}とも、みえる。…

いつも 秋であり

たれも えんぞるであるなら

まずは

うれしきせかいのすがた

△『花』p. 一六五▽

(24) 吉野、前掲書、pp. 一〇〇～一〇一。

(25) 河合隼雄『昔話の深層』(福音館、一九七七)。

『国文学 解釈と鑑賞』第四五巻第四号―特集 母性神話の崩壊

―(至文堂、一九八〇―四)

(26) 文芸教育研究協議会編、前掲書。

尚「重吉における母の位置」については、森田進氏の次の論がある。

森田 進「八木重吉・『流れる』

△『月刊キリスト』

△『教文館』一九六九―一〇

△『月刊キリスト』

pp. 三四～三五。

- (7) 以下における叙述は、主として、田中、前掲書によっている。
- (29) 前掲書、p. 二〇四。
- (29) 前掲書、pp. 七四〜七五。pp. 三六八〜三六九も参照されたい。
- (30) 分類は、本来は「てく」や「てくてく歩き」等の関連にも及ぶべきであろうが、ここでは、あくまで「てくてく」の項に限定している。
- (31) 田中、前掲書 p. 三〇七。
- (32) T. S. Eliot, 前掲書 a. 111。
- (33) 視点 (point of view) については、注(7)(8)で掲げたもの他に、左記についても参照。

Leon T. Dickinson, *A Guide to Literary Study*, (New York) 1959.

L. T. ディキンソン上野直蔵訳『文学研究法』(南雲堂一九六九) pp. 六〇〜六六。

また、文学作品の自立に、運動として大きな役割を果たしたニュークリティシズム (New Criticism) については左記参照。

川崎寿彦『ニュークリティシズム概論』(研究社、一九六四)。

川崎寿彦『分析批評入門』(至文堂、一九六七)。

川崎寿彦司会『シンポジウム 英米文学(8)現代批評の展望』(学生社、一九七四)。

64 『文芸教育』No. 二六、前掲書、p. 五。

65 『西郷竹彦文芸著作集(7)』前掲書、p. 三四二。

66 その有効性と問題点に関しては左記に詳しい。

『文芸教育』No. 二六、前掲書。

補遺 八木重吉研究文献目録

I 作品

● 八木重吉作品で一書をなしているもの。

(1) 自選詩集

(1) 『秋の瞳』(新潮社、一九二五)。

- (2) 『貧しき信徒』(野菊社、一九二八)。
- (ロ)その他(一)『定本』『花と空と祈り』まで
- (3) 加藤武雄他編『八木重吉詩集』(山雅房、一九四二)。
- (4) 草野心平編『八木重吉詩集』(創元社、一九四八)。(一九五一、創元文庫)。
- (5) 鈴木俊郎編『神を呼ぼう』(新教出版社、一九五〇)。(一九六一、新教新書)。

(6) 『定本 八木重吉詩集』(弥生書房、一九五八)。(一九七〇

— 十一、第一六版より改版)『弥生書房編集部』。

(7) 佐古純一郎『貧しき信徒(信仰詩集)』(新教出版社、一九五八)。

(8) 『花と空と祈り(新資料)』(弥生書房、一九五九)。(一九七〇— 十一第十三版より『八木重吉詩稿 花と空と祈り』と改

版。『弥生書房編集部』)。

(ハ)その他(二)『定本』『花と空と祈り』以後

(9) 佐古純一郎編『世界の詩 52 八木重吉詩集』(弥生書房、一九六八)。

(10) 『日本の詩集 14 八木重吉詩集』(角川書店、一九七二)。

〔鈴木享解説〕。

(11) 斎藤正二編『八木重吉』(ほるぶ出版、一九七五)。

(12) 『八木重吉詩集 上・下』(新文学書房、一九七七)。

(13) 郷原宏編『八木重吉詩集』(旺文社、一九七八)。

● 全集・アンソロジー等収載のもの

(14) 『日本現代詩大系 第十卷 昭和期(三)』(河出書房、一九五二)。

pp. 四〜七、(一九七五河出書房新社 pp. 一六〜一九)。

(15) 『全詩集大成 現代詩人全集 (12)』(創元社、一九五四)。

〔伊藤信吉解説〕。

(16) 『現代文学全集 47 昭和詩集』(角川書店、一九五四)。

- (17) 『現代日本文学全集 89 現代詩集』(筑摩書房、一九五八)。
〔村野四郎「現代詩小史」〕。
- (18) 木原孝一編『ANTHOLOGY 抒情詩』(飯塚書店、一九五九)。
- (19) 『現代日本名詩集大成 7』(創元社、一九六〇)。(鮎川信夫解説)。
- (20) 山本太郎編著『愛の詩歌集』(社会思想社、一九六〇)。
- (21) 『八詩集』(こころのうた) (童心社、一九六七)。(堀尾青史解説)。
- (22) 安西均他編『日本詩人全集 18』(新潮社、一九六八)。(安西均解説、草野心平「人と作品」、(付)山室静)。
- (23) 『日本の詩歌 23』(中央公論社、一九六八)。(阪本越郎鑑賞、江藤淳「詩人の肖像」)。
- (24) 伊藤整他編『日本現代文学全集 一〇八 現代詩歌集』(講談社、一九六九)。(伊藤信吉解説)。
- (25) 『近代日本キリスト教文学全集 13』(教文館、一九七七)。
〔「月報X」に重吉への言及あり〕。
- (26) 田中清光、串田孫一、井上光晴編『日本の詩 17 八木重吉、尾崎喜八、小熊秀雄』(集英社、一九七九)。(田中清光解説)
- ②重吉の作品は(6)(8)及び後出の(34)においてその、殆んどに触れ得る。これに(33)〔pp. 三三一～三三三、pp. 三五六～三五八〕(68)を加えるならば、活字化された重吉作品のほぼ全貌を得とらえるとしてよいであろう。
- Ⅱ 研究書・伝記・雑誌論文・鑑賞等
- 単行本、雑誌特集号
- (27) 『草』第三号(一九二八)。(八木重吉追悼号、(34)所収)
- (28) 『野菊』第六号(一九二八―一六)。(八木重吉詩集『貧しき信徒』批評号、(34)所収)。
- (29) 『詩人時代』十月号(一九三五―一〇)。(34)所収)。
- (30) 『八木重吉研究』(山雅房、一九四二)。(3)付録。(34)所収)
- (31) 関茂『八木重吉―詩と生涯と信仰―』(新教出版社、一九六五)。
- (32) 四竈経夫『八木重吉詩がたみ 祈り』(宝文館 一九六八、一九七九(新装版))。
- (33) 田中清光『詩人八木重吉』(麥書房、一九六九、一九七九改訂)。
- (34) 吉野とみ子 田中清光編『八木重吉未発表遺稿と回想』(麥書房、一九七二)。
- (35) 藤原定『詩の宇宙』(皆美社、一九七二) pp. 二七～六七。
- (36) 吉野登美子『琴はしづかに―八木重吉の妻として―』(弥生書房、一九七六)。
- (37) 岡安恒武『八木重吉ノート』(聖文舎、一九七七)。
- (38) 吉野登美子『わが胸の底ひに―吉野秀雄の妻として―』(弥生書房、一九七八)。
- 雑誌、紀要論文等
- (39) 小池辰雄「詩魂に応う―八木重吉氏の『神を呼ぼう』を読む―」『独立』一九(明和書院、一九五〇)✓。
- ※(40) 小森盛「夜雨と暮鳥と重吉」『至上律』一〇(青磁社、一九五二)✓。
- (41) 吉田精一『日本近代文学教養講座 第三卷、近代詩』(至文堂、一九五〇) P. 二九八。
- (42) 恩田逸夫『宮沢賢治と八木重吉』『国文学 解釈と鑑賞』六一〇(至文堂、一九六一)。
- (43) 吉野秀雄「妻よ、わたしの命がいるなら―宗教詩人 八木重吉のこと」『日本』八一(講談社、一九六五)✓〔『吉野

- 秀雄全集 第五卷』(筑摩書房、一九六九) pp. 二七～五六)。
- (44) 佐藤泰正「八木重吉——その側面」△『国文学研究』一(梅光女学院大、一九六五—十一) √。
- (45) 佐藤泰正「八木重吉と草野天平」△『福音と世界』一九六六—七月号(44)。(45) 共佐藤泰正『日本近代詩とキリスト教』(新教出版社、一九六八)。『文学と宗教の間』(創文社、一九六八)。
- (46) 関根正雄「想起の詩人 八木重吉」(一)(二)△『月刊キリスト』二月号～三月号(教文館、一九六七—二～三) √。
- (47) 鈴木二三雄「八木重吉の詩について」△『玉藻』二(フェリス女学院大、一九六七—四) √。
- (48) 松永伍一『日本農民詩史(上七)』(法政大学出版局、一九六七) pp. 四二〇～四二七。
- (49) 小田良弼「八木重吉の詩的世界」(一)～(五)△『国語国文』三七—一・三八—一・三九・四〇—一三・四一—一五(京都大学文学部国語学国文学研究室、一九六八—一～一九七二—五) √。
- (50) 今井保子「八木重吉論」△『文芸論叢』四(立正女子短期大学文芸科、一九六八) √。
- (51) 鈴木二三雄「八木重吉」△『本の手帖』八一—六(昭森社、一九六八—六) √。
- (52) 森田進「八木重吉・『流れる』発想の世界」△『月刊キリスト』十月号(教文館、一九六九—一〇) √。
- (53) 宇高悦子「八木重吉研究」△『玉藻』六(上掲、一九七〇—五) √。
- (54) 大河内昭爾「八木重吉と吉野秀雄」△『文学・語学』六一(全科大学国語国文学会、一九七二—九) √。
- (55) 金田和代「八木重吉論——友なるものについて」△『青山語文』二(青山学院大学日本文学会、一九七二—十二) √。
- (56) 関根順子「八木重吉試論——重吉詩における『かなしみ』について」△『白学園女子短大研究紀要』九(一九七三—

三) √。

- (57) 森田進「八木重吉の詩の世界」△武田寅雄他編『日本現代文学とキリスト教 大正昭和編』(桜楓社、一九七四) √。
- (58) 森田進「八木重吉と末繁博——重吉の『おしろい花』をめぐる——」△『四国学院大学論集』三一(一九七四—十二) √。
- (59) 郷原宏「近代詩人論 18 八木重吉——琴は鳴りだしたか——」△『詩学』三〇—八、(一九七五—九) √。
- (60) 鈴木二三雄「八木重吉の詩」△笹淵友二編『キリスト教と文学 第二集』(笠間書院、一九七五) √。
- (61) 関根正雄「重吉私記——没後五十年に——」△『本のひろば』二二〇(キリスト教文書センター、一九七六) √。
- (62) 溝井勇「八木重吉試論」△『日本文学ノート』五(現代文学研究会、一九七八—二) √。
- (63) 西村幸子「八木重吉研究——その詩作と信仰——」△『高知女子大国文』一四(一九七八—七) √。
- (64) 田中清光「八木重吉」△高橋洋二編『近代詩人百人 別冊太陽』No. 24(平凡社、一九七八) √。
- ※(65) 日高美貴子「八木重吉論——空間認識をめぐって——」
- (66) 関根正雄「ふるさとの顔は慈悲もて明るく——私の『八木重吉』の背景——」△『新教』三三—一九七九、夏季号(新教出版社、一九七九) √。

●国語教育関係

- (67) 斎藤喜門、上田幹一「母、こおろぎのうた」△倉沢栄吉他編『国語教材研究講座第五巻 文学的教材と説明文の教材(中学校)』(朝倉書店、一九五九) pp. 五六～七二(pp. 七九～八四に編者等による共同研究)。
- (68) 成瀬正勝他編『近代日本文学史 文学教育へのアプローチ』(明治書院、一九六六) pp. 五二四～五二八。

- ※69 大原輝夫『国語科主体的学習の探究』（明治図書、一九六八）
「P. 一四三「冬」、P. 二一八「人形」」。
- 70 須藤道子、鈴木哲夫「八木重吉『母』（小学四年）」△『感動
体験を育む詩の授業』（明治図書、一九七二）▽pp. 一一三～
一二四。
- 71 武田常夫『詩の授業』（明治図書、一九七二）「pp. 四七～四
九「美しくあるく」」。
- 72 石川祐爾「八木重吉作『白い雲』『秋の空』」△日本文学教育連
盟編『国語教科書の詩 その教材研究と授業過程案 中学校
編』（有信堂、一九七二）pp. 九五～一〇四▽。
- 73 水上正「八木重吉『童』（こども）」△西郷竹彦編『文学教育』
八（明治図書一九七二）pp. 六五～七二▽。
- 74 秋本政保『詩の授業』（国土社、一九七三）。
- 75 片岡文雄「宮沢賢治、中原中也、草野心平、八木重吉、山之口
一貌」△増渕恒吉、小海永二編『高等学校国語科教育研究講座
第二巻』（有精堂、一九七四）▽（pp. 一二三～一二五「うっ
くしいもの」）
- 76 加藤憲一「鉛とちようちよう」△西郷竹彦編『文芸教育』一七
（明治図書、一九七五）pp. 七一～九三▽。
- 77 西郷竹彦『詩の中の母と子と父と』（みずうみ書房、一九七
五）pp. 九一～一〇〇。
- 78 『西郷竹彦文芸教育著作集 13 詩の授業』（明治図書、一九
七五）「pp. 二四七～二六一「幼い日」「涙」「影」」
- 79 西郷竹彦監修『文芸読本 ぶんげい（文芸）指導資料集』（明
治図書、一九七六）
- 80 池本洋子「高等年段階の詩の授業——八木重吉『母の瞳』——」
△『教育学』「国語教育」二二三（明治図書、一九七六～一九
七九）
- 81 鈴木利子「八木重吉『童』の授業」△斎藤喜博『続々 介入授
業の記録』（二葉書房、一九七九）▽。
- 82 原田章之進『詩の読み方指導』（明治図書、一九七九）。
- 83 尾久潔「詩の教材分析と授業の構想」△『文芸教育』二九（前
掲、一九八〇）▽。
- 84 山崎進「あさるがふねをかきました」『影』の授業」△前掲
書▽。
- 85 小野十三郎、西郷竹彦「（対談）私の文章作法 3 歌とは逆
に歌に」△前掲書▽。「pp. 八八～八九「八あかつちの▽」」
- 鑑賞、その他
- 86 成田孝昭「八木重吉」△伊藤整他編『鑑賞と研究 現代日本文
学講座 詩』（三省堂、一九六二）pp. 一九六～二〇〇▽。
- 87 伊藤信吉『鑑賞現代詩 II 大正』（筑摩書房、一九六二、一九
六六新版）pp. 二四七～二五九。
- 88 松隈義勇「八木重吉」△木俣修、川副国基、長谷川泉編『人と
作品 現代文学講座九』（明治書院、一九六二）pp. 二七五～
二八二
- 89 江森国友「八木重吉」△草野心平編『現代詩の鑑賞』（社会思
想社、一九六四）。
- 90 小海永二編『日本の名詩 鑑賞のためのアンソロジー』（大和
書房、一九六五）pp. 四八～四九。
- 91 鮎川信夫『詩の見方』（思潮社、一九六六）pp. 一二九～一三
一。
- 92 川鎮郎「八木重吉『素朴な琴』『梅』」△『国文学 解釈と教
材の研究』二二五（学燈社、一九六七～四）pp. 五〇～五
三▽。
- 93 河村政敏「素朴な琴」△前掲書、一三十一～一三二（一九六八）P.
一六七▽。
- 94 恩田逸夫「八木重吉」△伊藤整他編『現代詩の鑑賞（3）』（明
治書院、一九六八）pp. 一九四～一九九▽。

- 99 鈴木享「八木重吉」△吉田精一、分銅惇作、大岡信編『現代詩評釈』（学燈社、一九六八）。
- 96 伊藤信吉他編『現代詩鑑賞講座 8 歷程派の人びと』（角川書店、一九六九）「斎藤正三鑑賞」。
- 97 伊藤信吉「詩をめぐる旅」（新潮社、一九七〇）pp. 二六六～二六九。
- 98 飛高隆夫「八木重吉」△吉田精一、分銅惇作編『近代詩鑑賞辞典』（東京堂、一九七〇）V。
- 99 萬田務 吉田弥寿夫『展望近代詩—その歴史と作品—』（双六社、一九七二）。
- 90 嶋岡農『抒情的人生相談集—詩による人生処方—』（社会思想社、一九七二）pp. 一一三～一一五。
- 101 萩原井泉水、橋本健三『短詩入門』（潮文社、一九七三）pp. 一六一～一六四。
- 102 佐藤泰正「八木重吉」△中村稔、三好行雄、吉田潤生編『近代の詩と詩人』（有斐閣、一九七四）pp. 一五五～一五九V。
- 103 小川和佑「八木重吉」△『国文学 解釈と鑑賞』四九七（至文堂、一九七四—七）V。
- 104 関良一他『日本近代名詩選』（右文書院、一九七五）P. 一五五。
- 105 清水汎「八木重吉の教詩鑑賞」△『奈良女子大学文学部研究年報』一八（一九七五—三）V。
- 106 佐藤泰正「宗教と近代詩」△三好行雄、竹盛天雄編『近代文学 8 近代の詩歌』（有斐閣、一九七七）P. 二二六。
- 107 佐藤泰正「八木重吉」△日本近代文学館編『日本近代文学大辞典 第三卷』（講談社、一九七七）V。
- 108 壺井繁治、村野四郎、伊藤信吉編『現代作詩講座 Ⅲ 名作にまなぶ』（酒井書店、育英堂、一九七九）P. 三三～三四。
- 109 田中清光「八木重吉」△小海永二編『現代詩の解釈と鑑賞』

（旺文社、一九七九）V。

110 大岡信「折々のうた」△『朝日新聞』一九八〇、五、二二（木）朝刊V。「「瞳」」。

111 大岡信「折々のうた」（岩波書店・一九八〇）P. 八九。

※未見

90 『『日本人物文獻目録』（平凡社、一九七四）P. 一〇九二。

65 『『国文学 解釈と教材研究』Vol. 二四—No. 九（学燈社、一九七九）P. 一九六』

69 『東和男編集代表『文学教材の実践・研究文獻目録』（金曜会、一九七七）P. 一五一』

注

本目録作成の為、関茂（日本基督教団下の橋教会牧師・盛岡市）野坂幸弘（岩手大学教育学部教授）広瀬朝光（岩手大学人文社会学部教授）の三氏から、資料提供をはじめとする御教示を得た。改めて感謝したい。

（一九八〇年六月二五日受理）